

障がいと共に生きるアーティスト達と  
そこにある世界を発信するフリーペーパー

# Hugs

はぐす について

「Hug」という言葉には、「愛情をもって抱きしめる」「こだわりを守り続ける」「自分自身を幸運だと思う」などの意味があります。フリーペーパーHugsは、障がいと共に生きながら創作や表現活動をしている方々や施設取材し、その活動の様子や日々の思い、そこから広がる豊かな世界を伝えていくことを目的にしています。

2022年から8号発行してきたHugs。今までは福祉施設を中心とした内容でお届けしてきましたが、今号より個人やプロジェクトなどにも焦点を当てた内容でお届けしていきます。またnoteでの発信を中心にし、フリーペーパーはダイジェスト版として発行してまいります。

[https://note.com/freepaper\\_hugs/](https://note.com/freepaper_hugs/)  
こちらのQRコードからもアクセス可能です。



## あいサポート・アートセンターからのお知らせ

### 事務所を移転しました

あいサポート・アートセンターは4月8日を以て、下記の住所に移転しましたのでお知らせいたします。

#### 【移転先住所】

〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2  
TEL/FAX: 0858-33-5151  
※電話、FAX番号を統一しました。

## あいサポート・アートセンターのお仕事紹介

### 障がい者アート活動支援事業補助金

障がいのある方の芸術文化活動を応援するための制度だよ。作品展への出展や発表会への出演などを目指し、指導者等の指導を受けながら行うアート活動に必要なお金を補助するよ。



まみちゃん

詳しくは、あいサポート・アートセンターのサイトに掲載しているので確認してね!



QRコードもあるよ!

## Hugs 次号のお知らせ

### 2024年 秋 発行予定

特 集: 未定  
コラム: あいサポート・アートセンターのお仕事紹介

## 編集後記

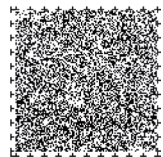
なんでも楽しもうとする、怖がらずにやってみる。目の前のことをどうとらえて、自分が何をするかという点で、障がいの有無は一切関係ない。片道10km以上あるカフェに一人で出掛け、東京を車椅子で駆け回り、父に内緒で沖縄に飛んだ優太さん。取材中、その行動力に何度も驚かされた。独創的な音楽と気さくな人柄にも惹かれたが、何より枠にとられない生きる姿勢がカッコよかった。彼は、この世界は仮の世界だという。見ている人の見方によって変わるから、と。その言葉がずっと残っている。

藤田和俊

Hugs 2024年夏号 vol.9  
2024年6月1日発行

発行/あいサポート・アートセンター  
〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2  
TEL/FAX: 0858-33-5151  
E-MAIL: tottori.asac@gmail.com  
HP: <https://aisapo.art/>

取材・編集・撮影/合同会社 僕ら  
藤田和俊  
デザイン/森下真后  
協力/鳥取県



これは「Uni-Voice」という音声コードです

障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信するフリーペーパー

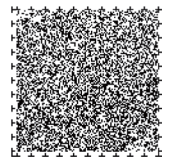
# Hugs

はぐす

2024年夏号 vol.9

特集  
サウンドクリエイター  
井谷優太

「枠にとらわれず、  
自分を生きる」



これは「Uni-Voice」という音声コードです



## 井谷優太さん (倉吉市/サウンドクリエイター)

1985年、福岡県生まれ。脳性麻痺の障がいがありながらパソコンを使った音楽制作やライブ活動を行なっている。2015年「第12回ゴールドコンサート」でグランプリを、2023年同チャンピオンシップ大会で準グランプリを受賞。2021年には東京パラリンピック開会式に出演するなど、幅広い舞台で活躍している。



井谷優太さん(左)と父・憲人さん

生まれつきの脳性麻痺で不自由な手を巧みに使い、パソコン上で音楽を生み出していく。音に合わせて体を揺らし、嬉々とした表情を見せるサウンドクリエイターの井谷優太さん。今やテレビCMやファッションショーなど幅広い分野で作曲依頼を受けている。人を魅了する音楽と多くの人を惹きつける生き方はどこからきているのか、父・憲人さんと共に話を伺った。

### 「もっと優太のことを知ってもらおう」

「まさか自分の子供に障がいがあるなんて考えてなかったし、何が正解かわからなかった」と憲人さん。小学校から地元北栄町を離れ、米子市の皆生養護学校に通うことに。18歳まで家族別々で暮らすことはつらい選択だったという。

「出口の見えない苦しい時期でした。でも、そんな負のパワーを別のものに変えたかった。これから生きていく上で、もっと優太のことをみんなに知ってもらおうと思いました」

会社でテニス同好会を作り、合宿などに連れ出した。余興のステージで歌う父と、最前列ではしゃぐ息子。そんな父から受けた影響はたくさんある。

「小学校から音楽と映画が好きだった。特に『バック・トゥ・ザ・フューチャー』と『エイリアン』が好きで、テクノロジーが発展すればなんでもできると考えた」

その好奇心は、まだ見ぬ未来やそこに広がる世界に向けられた。

### 「もっと社会と、人と関わりたい」

高校卒業後、実家近くの就労支援作業所で働けることに。安心する憲人さんだったが、優太さんの反応は違った。

「家と作業所の往復ばかりの毎日。ずっと給食の献立をパソコンに打ち込むだけだったし、つまらなかった(笑)。もっと社会とつながりたかった」

# 枠にとらわれず、自分を生きること

そんな時、DTM(デスク・トップ・ミュージック)と出会った。たまたまネットで音楽制作ソフトの体験版があり、「やってみたら意外とできた」。12000以上ある音を組み合わせていくのだが、外国製のため日本語の説明は一切ない。一つ一つ音を出しながら自力で習得した。

「音が多いと偶然の出会いがあるのもおもしろい。狙って作ることもあれば、偶然性を楽しみながら作ることもある。それと、小さい頃からゲームをしてきたおかげで、マウスを細かく動かすことができた」

それは優太さんが地元の友達と一緒に遊べるようにと憲人さんが勧めたこと。さまざまな「点」はやがて「線」になり、その才能は一気に開花。2015年、日本バリアフリー協会が開催した音楽コンサート「第12回ゴールドコンサート」でグランプリを受賞すると、優勝者が集うチャンピオンシップ大会でも準優勝に輝いた。

### 「怖いより、おもしろそう」

「刺激を受けたのか、もう東京に住む!と言い出して(笑)。困ったなあと思ったけど、大学に行かせたと思って送り出しました」

と、憲人さん。四年間、東京に部屋を借りて鳥取の二拠点生活を始めると、その行動力を発揮していく。自ら連絡をして東京芸術大学長の日比野克彦氏のアートプロジェクトに参加し、東京パラリンピックの開会式に出演。人脈を広げ、その後はパリや東京で行われるファッションショー、各種プロモーションやCM楽曲が依頼されるまでになった。未知のものに対する恐怖心や躊躇はないかと聞いた。

「『怖い』より『おもしろそう』が先にある。新宿の歌舞伎町にも行ったけど、ゲームで地図は覚えていたし、全然怖くなかった(笑)」

### 「この世界は(仮)。すべては自分次第」

好きなことで生きていくのは、簡単なことではなかったかもしれない。音楽を始めた頃、楽器屋で「車椅子が楽器に当たるから出てってくれ」と言われたこともある。でも、自分にできることが増え、音楽ができていく。そこには、きっと幼い頃に見た映画の世界に感じたワクワクがあったに違いない。

「中途半端はやめる、それなら突き抜けろと言っているんです。想像を超える息子の好奇心と行動力に何度も驚かされながらも、背中を押してきた憲人さん。その関係性が今につながった。数年前から優太さんは鳥の劇場(鳥取市鹿野町)が企画する「じゆう劇場」で俳優として参加。送り迎えしていた憲人さんも気づけば俳優になっていたというから、本当によく似た親子だ。

自分らしく生きることを見つけた今、思う。

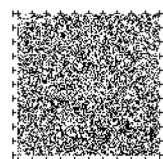
「この世界は(仮)。一つしかないように見えて、人それぞれで見方が変われば、違う景色が広がっている。どう見るかはその人次第。誰かが決めた枠ではない、その人らしい生き方ができ、みんなが幸せな社会を作るため、音楽を通してそれを伝えていきたい」



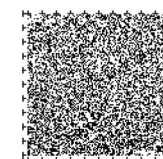
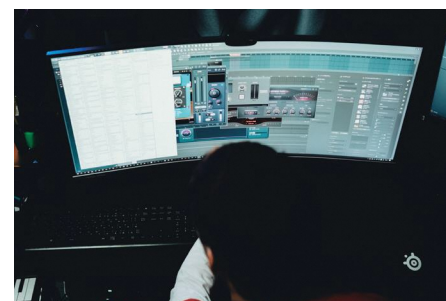
初出場でゴールドコンサートグランプリを受賞した井谷さん  
提供: NPO法人日本バリアフリー協会



12回大会でギターとセッションする井谷さん  
提供: NPO法人日本バリアフリー協会



これは「Uni-Voice」という音声コードです



これは「Uni-Voice」という音声コードです